

『ブラック・スキャンダル』

『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』『ネバーランド』『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』で3度のオスカーにノミネートされたジョニー・デップが悪名高き実在のギャング、ジェームズ・バルジャーを演じる。監督は『クレイジー・ハート』のスコット・クーパー。

アンサンブルキャストとして、FBI捜査官ジョン・コノリー役に『華麗なるギャツビー』『ゼロ・ダーク・サーティ』のジョエル・エドガートン、バルジャーの弟で州議会上院議員として権勢を振るウビリー・バルジャー役に『イミテーション・ゲーム／エニグマと天才数学者の秘密』でオスカー候補になったベネディクト・カンバーバッチ、バルジャーの腹心スティーン・フレミ役に『アルゴ』のロリー・コクレイン、バルジャーの手先ケヴィン・ウィークス役にTVシリーズ「FARGO／ファーゴ」のジェシー・プレモンス、FBIの主任捜査官チャールズ・マグワイア役に『ラブ・アゲイン』、TVシリーズ「ザ・フォロイング」のケビン・ベーコンがそれぞれ扮する。

1970年代のサウス・ポストン。FBI捜査官のジョン・コノリー（エドガートン）はアイルランド系ギャングのジミー・バルジャー（デップ）を口説き、FBIの協力者にする。その目的は共通の敵であるイタリアン・マフィアを壊滅させることだった。しかし、この禁断の密約は收拾のつかない事態を招く。バルジャーは警察当局の追及を逃れて権力を拡大し、ポストンきっての恐怖の犯罪王に、そしてアメリカ史上もっとも危険なギャングにのしあがっていく。

監督スコット・クーパー。脚本マーク・マルーク、ジェズ・バターワース。原作ディック・レイア、ジェラード・オニール。製作ジョン・レッシャー、ブライアン・オリバー、スコット・クーパー、パトリック・マコーミック、タイラー・トンプソン。製作総指揮ブレット・ラトナー、ジェイムズ・パッカー、ピーター・マルーク、レイ・マルーク、クリストファー・ウッドロウ、ブレット・グランスタッフ、ゲイリー・グランスタッフ、フィル・ハント、コンプトン・ロス。

脇を固める共演陣は、ジミー・バルジャーお抱えの殺し屋マルトラーノ役に『ドラフト・デイ』のW・アール・ブラウン、バルジャーとコノリーの密約に加わるFBI捜査官ジョン・モリス役に『エンド・オブ・ウォッチ』のデイビッド・ハーバー、バルジャーの一人息子の母親で恋人のリンジー・シル役に『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』のダコタ・ジョンソン、ジョン・コノリーの妻マリアン役に『8月の家族たち』のジュリアンヌ・ニコルソン、連邦検察官フレッド・ワイシャック役に『ボーン・レガシー』のコリー・ストール、ブライアン・ハロラン役に『ブルージャスミン』のピーター・サースガード、FBI捜査官ロバート・フィッツパトリック役にTVシリーズ「Parks and Recreation」のアダム・スコット、スティーン・フレミの義理の娘にして愛人でもあるデボラ・ハッセー役に『マレフィセント』のジュノー・テンブル。

撮影マサノブ・タカヤナギ（『世界にひとつのプレイブック』『ファーマス／訣別の朝』）、美術ステファニア・セツラ（『グレート・ビューティー／追憶のローマ』）、編集デイビッド・ローゼンブルーム（『インサイダー』でオスカーにノミネート）、衣装カシア・ワリッカ＝メイモン（『フォックスキャッチャー』）、音楽トム・ホルケンボルフ（『マッドマックス 怒りのデス・ロード』『バットマン vs スーパーマン ジャスティスの誕生』）。

ワーナー・ブラザーズ映画提供、クロス・クリーク・ピクチャーズ、ラットパック＝デューン・エンターテインメント提携、クロス・クリーク・ピクチャーズ制作、ル・グリスビ・プロダクションズ、フリー・ステート・ピクチャーズ、ヘッド・ギア・フィルムズ共同制作、スコット・クーパー作品、原題“Black Mass”、配給ワーナー・ブラザーズ映画（ワーナー・ブラザーズ・エンターテインメント・カンパニー）。

公式サイト：<https://warnerbros.co.jp/c/movies/blackmass/>

プロダクションノート

バルジャー

「密告者は許さねえ」

コノリー

「密告じゃない

“協定”だ」

バルジャー

「俺とクソFBIが協定だと？」

コノリー

「違う あんたと俺だよ

互いに利用し 助け合うんだ」

ボストンの犯罪王として悪名をとどろかせたジェームズ・“バルジャー”。バルジャーは2011年に逮捕されるまで、10年あまりFBIに追われ、ウサマ・ビンラディンに次ぐ最重要指名手配者だった。しかし皮肉なことに、バルジャーがここまで勢力を拡大できたのはFBIの教唆と幫助があつてこそだった。

本作が描くのは、極悪非道なギャングとしてならしたバルジャーがFBI捜査官のジョン・コノリーと交わした密約により、何のものがめも受けずに犯罪帝国を築いていくさまだ。コノリーは野心に駆り立てられ、バルジャーに捜査の手が及ばぬように計らい、増え続ける死体の数に目をつぶる。

監督と製作を兼ねるスコット・クーパーが説明する。「ジョン・コノリー、バルジャー、バルジャーの弟のビリーは幼なじみなんだ。3人ともサウス・ボストンの、通称“サウシー”の一角で育った。僕がこのストーリーに惹かれたのは、その3人の因縁なんだ。バルジャーとビリーは似ても似つかぬ兄弟だし、ジョン・コノリーは兄弟の実力を分かっている、昔から2人をあがめてきた。最終的にバルジャーが地元で大暴れするのを許すことになるのも、バルジャーの歓心を買いたかったからさ。子供のころ、遊び場でいじめられていたのを助けてもらったときから、ずっとバルジャーに気に入られたいと思ってきたんだ」

コノリーはニューヨーク・マフィアの逮捕をきっかけにFBI内で評価を上げるが、一方のバルジャーは違う方面で名をとどろかせていた。権力闘争を繰り返してきたバルジャーは地元のギャング集団“ウインターヒル”ギャングのトップに上り詰める。バルジャーを恐れる者もいたが、多くの住民にとって彼はロビン・フッドのような存在だった。直接的、間接的に地元サウシーに貢献していたからだ。

ジェームズ・バルジャーを演じるジョニー・デップが指摘する。「サウシーは昔も今も住民同士の結束が非常に強いんだ。地元の人たちは“ジミー”に対して、大きな恩を感じていた」。バルジャーはファースト・ネームの愛称“ジミー”と呼ばれるのを好んだという。「子供のころからジミーに憧れ、目標にする人も多かったんだ。ジミーは何をするにも自分の流儀を通し、たいてい勝利をおさめる。しかも圧倒的なカリスマ性があった。人を惹きつけてやまない独特の魅力があり、誰もがジミーと仲良くなりたいと思う。この人をもっと知りたい、理解したいと思わせるような求心力を備えていたんだ。ジェームズ・バルジャーはじつに興味深い人物だね。その原動力はどこから来るのか知りたいと思ったよ」

ジョン・コノリー役のジョエル・エドガートンは言う。「ジョンにとってバルジャーはアウトローであり、地元の星でもあるんじゃないかな。個人的な縁も深い。ジョンは地元の星とは昔からの顔なじみだし、その地元の星もジョンには良くし

てきた——昔はね。コナリーもFBIに入った当初はまっとうな志があり、立派な法の番人を目指していたんだと思う。だけど、彼の地元では正義と悪との境がじつにあいまいなんだ。憧れの星が悪の側にいるとなれば、志も変わるんじゃないかな。地元の犯罪者が何の制約も受けずに伸び伸びと暴れまわっているように見える。ジョンはそんな光景を目の当たりにして……しだいに悪に染まっていったんだと思う」

バルジャーのような人物に魅了されるのはコナリーだけではないと製作のジョン・レッシャーは言う。「映画やテレビや本を見ても分かるように、人はみなギャングの世界に心惹かれます。ギャングには一般社会とは違うルールがありますからね。わけても、この実話には悪名高きギャングと、たまたまその弟で州内一の有力政治家と、前途洋々のFBI捜査官とが密接に絡みます。これは作ろうと思って作れる話ではありません。事実は小説よりも奇なり、ですよ」

それでも映画化にあたっては多少のアレンジが必要だったとレッシャーは明かす。「判明した事実を余すところなく1本の映画に収めるのは、どだい不可能でした。複数の関係者を一人のキャラクターとしてまとめたり、一部の出来事は時間を短縮して描いたりしましたが、全体としては史実に沿うことができました。その結果、圧巻のストーリーが完成しましたよ」

バルジャー
「情報提供には2種類ある
絶好のチャンスだ
俺たちの抗争をFBIに戦わせる
敵を潰すために
FBIの保護があればやりたい放題だ」

バルジャーはFBIの情報提供者だった——その驚愕の見出しが「ボストン・グローブ」紙の一面を飾ったのは1988年。その後10年間で、FBIとバルジャーの癒着の実態が徐々に明らかになった。同紙の記者でこれをスクープしたディック・レイアとジェラード・オニールは、のちに事件の全容を一冊の本にしたためた。その著書『密告者のゲーム—FBIとマフィア、禁断の密約』（角川書店刊）は本作の原作だ。しかし、レイアとオニールは当初、この事件をまったく違う切り口で記事にするつもりだった。「もともとは2人の兄弟の——バルジャーとビリーの話として紹介する予定でした」とレイアは言う。「低所得者向けの公営住宅で育った2人がそれぞれの道で、まったく違うルールにのっとり、ともに頂点に立つまでの経緯を書こうと思っていたんです」

ビリー・バルジャーが目指したのは政界だった。大学出のビリーは裏社会に住む兄とは対照的な道をたどり、マサチューセッツ州議会の上院議長に上り詰める。

ビリーを演じたベネディクト・カンバーバッチもバルジャー兄弟の対比に注目した。「ビリー・バルジャーは長年、州の上院議会で絶大な力を持っていた。ビリーに陳情すれば、何でも通ったんだ。だけど、ビリーはバルジャーの弟でもある。血を分けた兄が20世紀を代表するであろう凶悪犯罪者——そのコントラストはすさまじいね」

バルジャー役のデップも同感だ。「ビリーは政界に入り、派手なパフォーマンスが身上の大物政治家になった。ビリーはビリーの道を究め、暗黒街に君臨したんだよ。それでも2人は揃って実家の母親を訪ねたりして、ずっと兄弟仲は良かった。社会的な立場はえらく違うけどね」

バルジャー兄弟のあまりにもかけ離れた足跡は記事のハイライトになるはずだった。ところが、意外な事実が判明する。「バルジャーはやり手のドンとして知られていましたが、それにしても法網をくぐるのが巧みだった。まるで魔法でも使っているかのようでした」とレイアは振り返る。「そこでタマネギの皮をはぐように取材を進めていくと、地元の当局内部に不審な動きのあることが分かりました。以前から疑われていたのですが、やはりバルジャーとFBIの関係は

おかしいことになっていた。そのときFBIの窓口になっていたのが、バルジャーと同じサウス・ポストン出身のジョン・コ
ノリーという捜査官だったんです」

マグワイア

「信用できる情報を流すと
なぜ分かる？」

コノリー

「幼なじみです
ジミー 弟のピリー そして俺
大人になっても
絆は変わらない
ジミーは俺との約束を守り抜く」

「裏が取れた時点で、バルジャーがFBIに通じていたことを記事にしました」とオニールは話す。「FBIにとって情報提供者は聖杯だし、“その筋”の人たちも警察内部に味方が欲しい。ですからバルジャーとFBIの馴れ合いはある意味で象徴的です。ただ、相手の捜査官がサウシーの出身じゃなかったら、バルジャーも情報提供者にはならなかったでしょう。サウシー育ちのコノリーだからこそ、ほかの捜査官と違って、バルジャーと意気投合できたのだと思います。コノリーは同郷のよしみにつけ込んで、バルジャーを情報提供者として抱き込み、局内でもてはやされました。でも、抱き込んだのはバルジャーのほうだったんです」

レイアが話す。「最初は、あのバルジャーがFBIの情報源だなんて信じられなかった。彼のイメージにまったく合いませんからね。我々は証拠を固め、事実関係を確認してから発表に踏み切ったんですが、我々が知り得たことは氷山の一角に過ぎませんでした」

「そして、ポーン！ 爆弾の導火線に火がついたんです」とオニールが言う。

「記事を発表した時点では、この事件の根がどれほど深く、暗く、おぞましいものか知る由もありませんでした。取材には2年を費やしました」とレイアは言う。「ですが、あの記事をきっかけに、バルジャーとFBIが絡む一大ドラマが露見し、歴史的スキャンダルに発展したんです」

製作のブライアン・オリバーはいち早く原作の映画化の権利を買い取った。「ギャングの幹部に協力を要請し、自分たちもギャングに手を貸す——FBIのその“発想”に興味を覚えました。あのFBIでさえ、こうして墓穴を掘るのなら、誰がそうなくても不思議でないと思いました。コノリーは正しいことをしているつもりだったけれど、途中で間違いに気づいたんでしょう。けれども、もはや引き返せなかったのだと思います」

脚本を担当したマーク・マルークとジェズ・バターワースは、コノリーとバルジャーをつなぐ地縁が、ほどけぬ結び目が変わったと言う。「コノリーは己の野心に負けて、新人捜査官のころに挙げた実績をフイにしてしまうんです」とマルークは指摘する。「彼はイタリアン・マフィアの支配からボストンを救いたかった。だからこそ、小手調べのつもりでバルジャーに便宜を図った。“持ちつ持たれつ”の関係を目指したんでしょう。だけど、バルジャーのような男を小手調べの相手にはいけない。すぐにかからめ捕られてしまいますよ」

「本末転倒とは、このことです」とバターワースが言葉を添える。「コノリーはFBIの代表として暴れ馬を手なづけようとしたけれど、逆に手なづけられてしまった。手綱を握っていたのはバルジャーのほうだったんです。バルジャーに縁もゆかりもない人間だったらその状況は見たはずですが、なぜかコノリーには見えなかった」

監督のスコット・クーパーによると、この脚本の魅力は登場人物たちのユニークな相関関係を描いたところにあるという。「僕はどういうわけか人生の悲劇や人間の性(さが)を深く描いたストーリーに惹かれるんだけど、この作品はそ

の両方を兼ね備えていたよ。まるでシェークスピア作品のように、興味深いテーマが含まれていた。墮落、背信、慢心……そういうテーマがひとつのストーリーに詰まっていて、ぜひ掘り下げてみたいと思ったんだ」

さらにこのストーリーには、さまざまな“家族”の形が対照的に(ときに矛盾をはらんで)描かれている。バルジャーとビリーに象徴される血縁による家族。コノリーとバルジャー、そしてバルジャーと“ウィンターヒル”ギャングに見る地縁による家族。「ジミー・バルジャーは家長として手下たちを仕切り、ギャングのメンバーを本物の家族だと思っていたんじゃないかな」とバルジャー役のデップは分析する。

もうひとつの家族の形が、自ら選んだパートナーとの関係だ。バルジャーと恋人のリンジー・シル(ダコタ・ジョンソン)、コノリーと妻マリアン(ジュリアンヌ・ニコルソン)がそれにあたる。「この2人が登場しなかったら、このストーリーに人間らしい情を絡ませることはできなかったんじゃないかな」と監督のクーパーは言う。「バルジャーとジョン・コノリーが人間的な一面をかいま見せるのは、リンジーとマリアンの前だけなんだ」

本作では欺瞞、野望、いびつな忠義といったテーマが全編を貫く。製作陣はそうしたテーマを任せられる監督としてスコット・クーパーに白羽の矢を立てた。製作のレッシュャーが振り返る。「初めて顔を合わせたときのスコットの言葉に惚れました。彼はこんなことを言ったんですよ。『まずは登場人物を人間としてとらえたい。そのうえで彼らの悪行に視点を移したい』と。スコットは有言実行してくれましたよ……登場人物の行いをかばうことも正当化することもせず」

「清潔な人間が一人も出てこない。そういう映画を上質に仕上げるには監督の力量と知性が問われます。本作はまさにそのタイプの作品でした」と製作のブライアン・オリバーは話す。「登場人物はそれぞれに変化を見せますが、誰一人としてヒーローにはなりません。そんなストーリーを展開させることは生易しいことではありませんが、スコットは見事にやってのけました」

「スコット・クーパーは奇才だよ」とデップも感心する。『『クレイジー・ハート』と『ファーンズ／訣別の朝』を観て、恐れ入ったんだ。両作品でスコットが見せた奥の深い演出は、とても新進監督とは思えなかった。だから、いつか組んでみたいと思っていたんだ。現場での仕事ぶりを見ていると、これが3作目とは信じられなかった。その手腕、ビジョン、熱意に惚れ惚れしたね。スコットはこの作品を飲んで、食って、寝倒した。まったく、すごい男だよ。スコットが監督するなら、電話帳の撮影にだってつき合うね」とデップは笑う。「本気だよ！ スコットのことは心の底から尊敬してるんだから。才気あふれる監督で、これからが本当に楽しみだよ」

コノリーの直属の上司チャールズ・マグワイアを演じたケビン・ベーコンも同感だ。「以前からスコット作品のファンだったんだ。今回はセットを見事に仕切ってくれたことに感謝している。スコットのおかげで、キャストのあいだにオープンで協調的なムードが生まれた。今回の現場はチームワーク抜群でやりがいもひとしおだったよ」

ほかのメイン・キャストはロリー・コクレイン、ジェシー・プレモンズ、W・アール・ブラウン、コリー・ストール、ピーター・サーサガード、アダム・スコット、ジュノー・テンブルだ。

ストーリーを紡ぐうえで登場人物と同様に重要だったのが舞台となる街だった。本作をボストンで撮影したのは「ほかの場所は考えられなかったから」とクーパーは言う。「この作品の時代背景はロケーションや街並みをとおして観客に伝わると思う。ボストンのたたずまいは非常にユニークだからね」

製作のタイラー・トンプソンも同じ考えだ。「ボストンは作中で立派な役目を果たしています。ほかの都市ではこうはいかなかったでしょう。ボストンには特有の土地柄があり、そこに住まう人たちがもすばらしかったですよ」

「これはボストンが生んだストーリーです」と製作のパトリック・マコーミックは断言する。「当時の余韻は、今も街のあちこちに染み付いています。その余韻を肌で感じ、ボストンならではの景観を捉え、できるだけ実際の事件現場で撮影するためにもボストンに出向く必要がありました」

「映画化するには、多少なりとも史実や人物をアレンジする必要があるとは思いますが」と原作者のレイアは言う。「それでも時代考証は欠かせません。キャストもスタッフも、なかば取り憑かれたようになって、当時を正確に再現しようと努めていました」

監督のクーパーが明かす。「映画を撮るのはいつだって難しいけれど、わずかでも史実が絡むと、なおさら難儀だね。とくに今回のストーリーは裾野が広いし、大勢の関係者がそれぞれの視点で語っているから、事件の真相が見えにくかった。当時の出来事を忠実に沿って描くのは、かなり骨が折れたよ」

ウィークス

「サウシーのガキどもは一
“悪党と警官ごっこ”で育ち
大人になっても同じだ
しかも 悪党と警官の
区別がつかない」

キャスティング

当初、バルジャーを筆頭とする“ウィンターヒル”ギャングはFBIの監視対象にすらなっていなかった。「映画の冒頭ではノース・エンドを拠点とするイタリアン・マフィアのコーサ・ノストラがボストンを牛耳っている。バルジャー率いるアイルランド系アメリカ人の一派、“ウィンターヒル”ギャングは弱小組織に過ぎず、ゆすりや恐喝やヤミ金業で日銭を稼ぎ、たまに殺人事件を起こす程度だった」と監督のクーパーは説明する。「当時のボストンの組織犯罪は、もっぱらジェンナーロ・アンジュロとその手下の仕業だったんだ。故郷に戻ったコリリーは、FBIのボストン支局で昇進するにはコーサ・ノストラを一網打尽にしなければいけないと悟るんだ。そこで必要になったのがバルジャー。バルジャーなら貴重な情報源になってくれると見込む。けれども、バルジャーは危険極まりない男だから、FBIとしてはバルジャーを情報提供者として認めることに難色を示すんだ」

FBIの懸念はもつともだった。バルジャーはコリリーに情報の提供を約束し、いわゆるFBIの“協力者”になる。コリリーが続ける。「はっきり言って、その“連絡係”は人一倍ずる賢くて良心のかけらもない。そんな男がFBIからじきじきに許可をもらったんだ。悪事の限りを尽くす許可、好き勝手に暴れ回るお許しをね。これは自滅へのレシピだよ。結果として、この一件がFBI史上最悪のスキャンダルに発展したんだ」

バルジャー役のジョニー・デップは「盗人にも仁義あり」と言わんばかりに、こう指摘する。「最初に断っておくけれど、ジミー・バルジャーは誇り高き男さ——少なくとも自分ではそう思っている。だから、コリリーに話を持ちかけられたときも「たれこみ屋になるのはまっぴらごめん」と真っ先に言い切った。いくら金を積まれようが、誰の頼みであろうが、身内を売るようなマネは絶対にしないと。それでもイタリアン・マフィアの検挙に手を貸すことにしたのは、商売上の計算が働いたからさ。ジミーにとっては間違いなく有利だからね。あれだけおいしい条件を提示されたら、誰でも話に乗るんじゃないかな。だから、ジミーも乗った。そして、FBIにはほとんど協力せず、見返りだけはたっぷりせしめた。ジミーのほうが一枚うわてだったんだよ」

今回のデップの役どころについて、監督のクーパーは「ジョニーが演じたことのないキャラクターじゃないかな」と言う。「バルジャーはチャーミングかもしれないけれど、目が合った相手を瞬殺するような男。万人に受ける人物でないことは、ジョニーも最初から承知していたよ。バルジャーのような極悪非道な役はジョニーにとって初めてのはずだよ」

「ただし……」とクーパーは続ける。「ジョニーはバルジャーの人物像をあらゆる角度から表現しようと考えていた。狂気や残虐性といった欠陥だけではなく、人間性も出したいと言っていたよ。でも、そこにはリスクがある。悪魔の権化のような人物を美化していると批判されかねないからね。作中で、バルジャーの外道ぶりはこれでもかというほど描いた。奴は残忍な人殺しだし、ジョニーもその残忍さを大いに演じてくれたよ。ジョニーは努力の上に努力を重ね

て役を作り込んでくれた。徹底的にリサーチしたうえで、僕と膝を突き合わせ、ほかのスタッフも交えてバルジャー役についてじっくり話し合ったんだ。その結果、声のトーンをちょっと変えるだけで、バルジャーという社会病質者になりきっていたよ」

「実在のジミー・バルジャーは謎多き男なんだ。そこがジミーを“つかむ”うえで高いハードルだった」とデップは振り返る。「だけど、ジミーのかつての友人や仲間に出会って、参考になったよ。おかげで人物像の輪郭がつかめたと、演技のたたき台にすることもできたんだ。ジミーは一触即発の爆弾だったけど、一方では感傷的でデリケートな一面もある。そんな人物を演じるのは綱渡りをするような感覚だったね」

デップが追求したのは人物像だけではない。「実在する、あるいは実在した人物を演じる時は、それが誰であろうと敬意を払うことがとても大切。その人の生きざまを演じさせてもらうわけだから、たとえ犯罪者であっても、できるだけ本人に近づくように努めるのが礼儀じゃないかな。だから特殊メイクの力を借りることにしたんだ。今回は、長年世話になっているジョエル・ハーロウにお願いしたんだけど、それは見事な出来だったね」

監督のクーパーが言葉を添える。「ジョニーは外見の特徴も余すところなく自分のものにしようとしていた。バルジャーは薄毛で青い瞳だけれど、ジョニー自身は瞳も髪もダークカラーで、しかも頭はフサフサ。なのに、ジョエル・ハーロウと組んでバルジャーの見た目を完璧なまでに作り上げたんだ。2人は昔の映像や写真を参考にしながら、試行錯誤を繰り返して、バルジャーの顔立ちを正確に再現した——目と目の間隔、鼻の形、唇のゆがみ、あごのライン、生え際に至るまでね。あまりにもそっくりだから、バルジャー本人を知る人はゾッとしていたよ」

実物のバルジャーを知る原作者のディック・レイアは「ジョニーはバルジャーそのもの、まさに生き写しでした」と舌を巻く。「身振り手振りや闊歩する様子までそっくりだった。不気味でしたが効果は絶大でしたよ」

コノリー役のジョエル・エドガートンがデップとの共演について話す。「ジョニーの役作りは、内面も外見も含めて、本当にすばらしかった。僕が歓迎するのは現場で別人に化ける共演者なんだ。もちろん、ジョニーはその一人。バルジャーになりきっていたよ」

「ジョエルと共演できて本当に楽しかった」とデップもエールを送る。「こっちがどんな球を投げても、投げ返してくれるんだ。そういう心のキャッチボールができる相手、こちらの球を受け止めてくれるタフな俳優と共演するのはいいものだよ。ジョエルと絡むシーンのなかで、ジョエルが新しいことや違うアプローチを試さなかったときは一回もない。毎回、驚かせてくれたんだ。本当に大した役者だよ」

エドガートンもデップと同様にリサーチを重ね、ジョン・コノリーの思惑と影響を掘り下げた。「ジョンはニューヨークでマフィアの大幹部を逮捕して一旗揚げ、その足で地元のボストンに戻り、英雄として迎えられるんだ。そして、次はイタリアン・マフィアをつぶしてやろうと意気込む。ジョンの取った手法は幼なじみを……つまりバルジャーを巻き込むこと。ジョンはバルジャーを説得し、FBIの情報提供者として厚遇することを約束するんだ。けれども、そこから雲行きが怪しくなってくる。原因はジョンがバルジャーに提示した条件さ。ジョンは言ったんだ——おまえがコーサ・ノストラの検挙に協力してくれたら、何をしてもFBIは“目をつぶってやる”。ただし人殺しはするな」

バルジャー

「これはタレ込みでも
密告でもない ビジネスだ」

コノリー

「もちろんだとも
あんたは“連絡係”だ
あとは好きにしろ
大物を逮捕できれば

誰も文句は言わない」

悪魔との取引は成立した。

「まもなく歯車が狂い始めるんです」と製作のブライアン・オリバーは説明する。「コノリーは頻繁にバルジャーとつるむようになり、仕事上のパートナーではなくなる。一線を越えてしまうんです。バルジャーは、一線を越えたコノリーを意のままにできると考えるんですよ」

コノリーの心は未来の成功に、そして成功が運んでくるうまみに傾き、目的が手段を正当化すると信じていた。エドガートンがコノリーの心中を分析する。「たぶんジョンはみんなに祝福され、尊敬されたかったんだろうね。だけど、それゆえに墓穴を掘ってしまう。ジミーの術中にすっかりはまって、危ういところに足を踏み入れ、自分が深い穴に落ち、良心を失っていることに気づかない。ジョンの人生を崩壊させるのはバルジャーとのいびつな関係であり、一人の犯罪者に認められたいという執着なんだ」

監督のクーパーが言う。「ジョエル・エドガートンが演じたジョン・コノリーは本当に難しい役どころでね。さまざまな顔を使い分けなくてはいけない。妻といるときの顔、ピリー・バルジャーといるときの顔、バルジャーと一緒にいるときの顔。もちろん、FBIの同僚の前ではまったく違う顔になる。ジョエルの演技はじつに繊細だ。コノリーの強気、虚勢、見栄、得意だけでなく、内に秘めた不安や気の弱さまでにじませている。(元連邦検察官の)フレッド・ワイシャック本人がセットに来たとき、驚いていたよ。ワイシャックはコノリーの昔なじみだけど、ジョエルの演技を見て『何から何までコノリーの特徴を完全に捉えている』と感心していた。ジョエルは大した俳優だよ」

エドガートンも監督のクーパーを絶賛する。「スコットはキャスト一人ひとりに合わせた話し方を心得ている。俳優は、監督と一対一の関係を築きたいものなんだ。それに役作りの参考になる情報を惜しげもなく提供してくれるから、演技の方向性を考えたり、役の心情や心境の変化を理解するのに役立ったよ。スコットは大変な情熱家で、撮影の準備も完璧だった。素材をよく研究していたし、ストーリーの背景も知り尽くしていたからね。素顔のスコットは本物の紳士。すごいエネルギーを秘めた人格者って感じかな。おかげで毎日の撮影が楽しみだったよ」

ピリー・バルジャー役の本ネディクト・カンバーバッチも、このプロジェクトに惹かれた理由のひとつにクーパーの存在を挙げる。「スコットは俳優を惹きつけてやまない魅力があるんだ。彼の過去の監督作を観て、すぐに出演を決めたよ。スコットは俳優出身だから、カメラの前に立つ者の気持ちに寄り添ってくれるし、最高の演技を引き出すコツを心得ている。監督としては自然主義を重んじるタイプだね。それが彼の持ち味じゃないかな。スコットのおかげで、俳優の醍醐味でもある心のひだを演じるときは、とくに楽しくできたんだ」

「本ネディクトのピリー・バルジャーは秀逸。ピリーをさまざまな側面から体現してくれた」とクーパーは言う。「実物のピリーよりも背が高いけれど、それがまったく気にならないのは、本ネディクトがピリーの社会的立場や胸の内をよく理解しているからなんだ。本ネディクトは資料映像を何度も見直して、ピリーの物腰や話し方を徹底的に研究してくれた。ピリーの口調は兄のバルジャーとはまったく違うんだ。歯切れが良くて、教養の高さをうかがわせる話し方をするんだよ」

カンバーバッチにとって、映像によるリサーチは役作りの要だった。「実在の人物を演じるのは責任の重さが違う。ストーリーの語り手になるだけではすまないんだ。この人物が世の中に存在したという事実を肝に銘じたうえで、キャラクターとして演じるにはどこを犠牲にするべきか考えないといけない。映画は歴史の一部になるだけに、影響力が大きいからね。映画は現代版の口述史と同じで、物語や登場人物が次世代へと語り継がれていく。だから慎重に——本当に慎重にならないといけないと思うんだ」

ピリー

「ジミーが何をしようと

私に関係ない」

コノリー
「聞け ビリー
お前の兄貴はとても危険な状態だ
誰だって“友達”が必要なんだ
ジミーでもお前でも
協力あつての成功だろ
上院議員」

カンバーバッチはビリー・バルジャーの人物像を「昔気質で一徹。アイルランド系アメリカ人が政界進出を果たした時代を象徴する人物」と分析する。「ビリーはきわめてインテリで博識なんだ。権勢を振るっているけれど、じつは公私の板ばさみに苦しんでいる。兄のバルジャーを慕いながら、一方で公僕としての務めを大切にしているのが見て取れるんだ。そういう葛藤を表現するのはやりがいがあったよ。バルジャーとビリーの関係については、兄と弟として描くにとどめたんだ。2人が互いの立場をどう守り、フォローしあっているかについては、あえて描いていない。そこには触れず、2人が強い兄弟愛で結ばれていることだけを示して、あとは観客の想像に任せることにしたんだ」

カメラの前を離れても、デップとカンバーバッチは「兄弟のような仲」だったとデップは明かす。「ベネディクトはとても献身的な役者で、今回も期待以上の結果を出しているんじゃないかな。ビリーの心境、忠誠心、兄への思いが透けて見えるようだよ」

バルジャーが弟のビリー以外に心許す相手は“ライフルマン”ことスティーヴン・フレミである。バルジャーはフレミに全幅の信頼を置いており、FBIとの密約(ビジネス・チャンス)をフレミにだけは打ち明ける。「フレミはバルジャーに比べれば地味だし、口数も少ないけれど、凶暴性では負けていないんだ」とフレミ役のロリー・コクレインは指摘する。「バルジャーから密約のことを打ち明けられたときは、さすがにビックリするんだ。警察やFBIとつながっていることがバレたら、殺されかねない世界だからね。だけど、バルジャーの思惑はFBIを利用することにある。こちらは大した情報を流さず、もっぱらFBIから情報を引き出す算段なんだ。警察内部の動きを知り、密告者をあぶり出すためさ。それができれば、何をやっても捕まることはないからね」

「ロリー・コクレインは完全にスティーヴン・フレミに化けていた。撮影の合間も殺気を漂わせていて怖かったですよ」と製作のタイラー・トンプソンは証言する。

製作のジョン・レッシュャーによると、コクレインは役作りの段階からサウス・ボストンにすっかり溶け込んでいたらしい。「だから、ロリーのことを“サウス・ボストン市長”と呼ぶことにしました(笑)。地元の人みんなと顔見知りになっていましたから。ロリーは全身全霊をかけて役作りに打ち込み、気迫のこもった説得力ある演技を披露しています。作品の出来に大きく貢献してくれました」

「現地の人と知り合えて良かったよ。フレミを知る人も何人か残っていたから、話を聞いて回ることができたんだ。どんなに小さな情報でも参考になったよ」とコクレインは振り返る。

コクレインに同行して“サウシー”めぐりをしたのは、ケヴィン・ウィークス役のジェシー・プレモンスだ。「最初の数週間は僕もロリーも刑事気分。役作りに使えそうな情報にたどりつくために、あらゆる手がかりを求めて歩き回ったんだ」

ケヴィン・ウィークスは“ウィンターヒル”ギャングの新入りにして最年少メンバーだ。プレモンスはこの役を演じるために20キロ近く増量した。「スクリーンに初登場するときのウィークスは18歳くらいの設定なんだ」とプレモンスは説明する。「当時、奴は“トリプル・オー”というバーの用心棒をしていた。そのバーはバルジャーたちの溜まり場だったんだ。店の外で乱闘が始まり、ボクシングをかじっていたウィークスは、有利とは言えない状況のなかで猛然と応戦

する。外に出てきたバルジャーは、そんなウィークスの根性を見込んで、ギャングの戦闘要員としてスカウトするんだ」

プレモンズが続ける。「ウィークスの身になって、いろいろ考えるのは楽しかったよ。もし自分があの土地で、ああいうふうに育っていたら、どうしただろう……とかね。ウィークスなら、バルジャーの横に立っているだけで箔がついたように感じるはずさ。だから、バルジャーの誘いを断るはずはないよね」

監督のクーパーは当初からウィークス役をプレモンズに依頼したいと考えていた。「ジェシー・プレモンズに最初に注目したのは『ザ・マスター』での演技を観たときだね。僕は今回の契約書にサインしたときから、ウィークス役を彼にお願いしたいと思っていたんだ。ストーリーの進行とともにウィークスは大きく成長する。世間知らずのタフな少年から仕事熱心な用心棒へ、そしてバルジャーがサウシーを制するのを見届ける目撃者へと変化するんだ。ジェシーは表現力が非常に豊かで、この役でも異彩を放っている」

ピーター・サースガード扮するブライアン・ハロランは、“ウィンターヒル”ギャングの末端のメンバーだが、バルジャーを密告しようとして間違いを犯す。密告を受けたのはFBI——すなわち、特別捜査官のジョン・コナリーだった。

「ピーターはこの役にはまっていたよ」と監督のクーパーは言う。「ブライアン・ハロランはジャンキーで、ソワソワして落ち着かないんだ。まあ、彼の置かれた状況を思えば、それも分からなくはないけどね。ピーターは、そんな挙動不審のジャンキーを完全に自分のものにしていて、出番は短いけれど、記憶に残る演技を披露しているよ」

コナリーの同僚には、バルジャーを情報提供者として厚遇することにメリットよりもリスクを感じる者がいた。コナリーの直属の上司である主任捜査官チャールズ・マグワイアもその一人だ。「マグワイアはバルジャーを抱き込むことに大いに難色を示すんだ。バルジャーのタチの悪さを知っているから、部下の身が危険にさらされるのではないかと懸念している」と監督のクーパーは説明する。

マグワイアは本作のために設定されたキャラクターの一人だ。クーパーがそのいきさつを説明する。「マグワイアは実在の主任捜査官を何人かミックスして作り上げた、架空の人物。本物の主任捜査官は3~4年で異動になるけれど、この作品は数十年の-spanを描いているからね。FBIの戦略を最後まで見届けるキャラクターが必要だと思ったんだ」

クーパーが続ける。「このキャラクターをケビン・ベーコンが演じているんだけど、彼以外の配役は考えられなかった。ポストンなまりから物腰に至るまで、このストーリーに自然に溶け込んでいるんだ。そのたまたまは威厳ある主任捜査官にふさわしい」

ベーコンは自身の役どころについて「マグワイアは不正に厳しく、法の番人としての意識が非常に高い」と評する。「彼はある意味、FBIの“理性の声”だ。マグワイアのような冷静な人間も必要じゃないかな。バルジャーを使ってイタリアン・マフィアを摘発するというアイデアに、諸手を挙げて賛成しない人間がいる。だから、バランスが取れるのではないかと思うんだ。マグワイアはジョン・コナリーをせっかちな男と見ているようだね。コナリーの経歴、捜査手法、強引な性格を快くは思っていない」

マグワイアと対照的なのが、同じコナリーの上司にあたるジョン・モリス特別捜査官だ。強引なジョン・コナリーと人たらしのバルジャーに惑わされ、判断力が鈍ってしまう。モリスを演じるデイビッド・ハーバーが言う。「コナリーは自信家で目的を達成する能力が高い。モリスはそんなコナリーに憧れに近い感情をもつんだ。コナリーはバルジャーを協力者にする考えを必死でアピールし、モリスをまんまと説得する。ところが、2人は一線を越え、ギャングと癒着するようになってしまった。モリスはバルジャーの歓心を買いたい一心で、キャリアも将来も犠牲にしかける。バルジャーは今では愛嬌を振りまいていても、次の瞬間には手のひらを返すような男だ。モリスはそれに気づき、ようやく目を覚ます。そこからカウントダウンが始まるんだ」

さらに清廉潔白な連邦検察官フレッド・ワイシャックの登場で、事態は大きく転換する。コナリー・ストール扮するワイシャックはレッドソックス戦のチケットを手渡そうとしたコナリーに対し、着任早々、不快感を示す。コナリーが情報提供者のバルジャーについて耳障りのいいことを言っても納得しない。

「前任の連邦検察官は放任主義で、コリーとバルジャーの馴れ合いにメスを入れることはなかったんだ」とストールは指摘する。「そこに新任のフレッド・ワイシャックがやって来て、何かがおかしいと気づく。バルジャーは信頼できる情報提供者のはずなのに、何ひとつ有力な情報をもたらさない。むしろ、情報はFBIからバルジャーにもつぱら流れている。これは話が違うぞと思うんだ。ワイシャックはコリーと初めて言葉を交わしたとき、これから新体制を導入すると宣言する。コリーの鎧に初めてヒビが入る瞬間さ」

ストールにとって撮影の初日、セットにはフレッド・ワイシャック本人の姿があった。「ちょっと緊張したね」とストールは明かす。「だけど、フレッドに会うことができ、かけがえのない思い出になったよ」

当時はFBIもギャングも“男だけの世界”だったが、作中に登場する女性はそれぞれストーリーの展開に大きな影響を与える——たとえ、男たちの犠牲に過ぎなくても。

デボラ・ハッセー役のジュノー・テンプルは、今回の役どころについて「デボラは育ての父親といかがわしい関係にあるの」と含みをもたせる。「彼女は知らぬまにバルジャーの不興を買い、深刻な結末を招くのよ」

ダコタ・ジョンソン扮するリンジー・シルはバルジャーの恋人で、バルジャーの一粒種の母親でもある。「ダコタ自身の愛らしさや素朴な人柄をそのまま演技に生かしてもらいたかった。そうすれば、口数が多いとは言えないバルジャーといいコントラストになると思ったんだ」と監督のクーパーは言う。

「リンジーは、多少なりともバルジャーから人間らしさを引き出すわ。とくに息子を愛する父親としての顔をね」とジョンソンは言う。「それでバルジャーの残忍さがやわらぐわけではないけれど、違う一面がのぞけることは確かよ」

ジョン・コリーの妻マリアンはバルジャーに深入りしていく夫に異変を感じる。「マリアンはジョンと顔を合わせる機会を失っていくの」とマリアン役のアリアンヌ・ニコルソンが話す。「そして、家に帰ってきたジョンを見て、ずいぶん変わったことに気づく。派手な腕時計におしゃれなスーツを身に着け、雰囲気も今までとは違っていった。要するに、ジョンは大物気取りで別人のようになっていたのよ。マリアンはそんな夫に愛想を尽かし、2人の夫婦仲は冷えていくわ」

マリアン

「変わったわね
ジミーのせい」

コリー

「俺は貧しい街に生まれ
仲間同士の忠誠心で
生き抜いた
忠誠心が すべてだ」

「当初、ジョンとマリアンは深い愛情で結ばれていて、希望に満ちていた」と監督のクーパーはコメントする。「故郷に帰ってきた2人は地元で歓迎され、ジョンはFBIのボストン支局で活躍を期待される。ジョンはたしかに活躍するけれど……FBIが期待したとおりではなかったんだ」

ジョン・コリー役のエドガートンはこう考える。「マリアンはこの作品の良心じゃないかな。そして、夫のジョンがいかにも道を踏み外しているかを映す鏡でもある。夫婦間の亀裂は、ジョンの逸脱ぶりを物語っているんだ」

ニコルソンはマサチューセッツ州メドフォードの出身だけに、大半のキャストよりも利があった。特徴的なボストンなまりが耳になじんでいたからだ。ニコルソンは「ボストン流のアクセントは“すっごく(wicked)”やっかいなの」とご当地のスラングを交えて言う。「だけど、キャスト全員が見事にマスターしたのを見て、本当に感心したわ」

キャストはハワード・サミュエルソンとカーラ・メイヤーの指導を受けながら、ボストンの、とりわけサウス・ボストン特有の発音を徹底的に練習した。国際色豊かなキャストだけにスタート地点もまちまちだ。

エドガートンは言う。「僕はオーストラリア人だけど、こんなに手ごわいアクセントを相手にしたのは初めてじゃないかな。ボストンのアクセントは本当に独特だから、ほかのアクセントと違って、出来の良し悪しが厳しくチェックされる。だけど、最大の試練は最高の結果を生むことがあるからね。自分のカンと耳を信じて、あとは練習あるのみだった。バッチリ決まったときは体で分かるものなんだ」

ビリー・バルジャー役のイギリス人俳優ベネディクト・カンバーバッチが心得たのは、サウシーで生まれ育ち、その原点を片時も忘れない男が、現在は政界の高みに身を置いているという点だ。「ビリーの映像を延々と観たけれど、弁舌さわやかでウィットに富んだ彼のスピーチには、出身地と現在の立場の両方がはっきりと出ていたよ。ビリーが主催した、あの聖パトリック・デーの朝食会でもそうだった」とカンバーバッチは言う。「ビリーは天性のエンターテイナーで、笑い話もモノマネも得意。だから、どんな場面でもビリーの声色を練習できたし、実際にそうしたんだ」

バルジャー役のジョニー・デップの場合は「たくさんのサウシーの人たちと接することにしたよ。彼らが話しているのを聞いているだけで勉強になった。地元の人がしゃべっているのを聞き取って、すべて吸収したんだ」。

「どのキャストもヒアリングの力が高くて、ボストンなまりを習得するのに一生懸命努力してくれた」と監督のクーパーは言う。「これだけ大所帯のアンサンブルキャストとなると、一人ひとりに具体的な要望を出すことがとても重要なんだ。いい役者は思い切り胸襟を開いて、魂まで覗かせてくれるものだけど、今回のキャストはまさにそうだったよ」

ワイシャツク

「バルジャーを挙げたい。

必要なら街中の犯罪者を

しょっ引く

高利貸し ノミ屋

ヤクのディーラー

たった1人の証言で十分だ」

撮影の舞台“ビーンタウン”

さらにクーパーはカメラの背後に控えるスタッフを頼りに、本作のトーンとストーリーの舞台を構築した。「優秀なスタッフのおかげで、このうえなくリアルで精巧な作品に仕上がったよ」とクーパーは満足そうに言う。「撮影監督のマサノブ・タカヤナギは僕の良きパートナー。前作も担当してもらったし、僕が好む構図やライティング、どのタイミングでカメラを動かすか動かさないかまでちゃんと心得ている。美術のステファニア・セツラは古い友人であり、ディテールにこだわりをもつ偉才でもある。衣装のカシア・フリッカ＝メイモンは半端ない審美眼の持ち主だし、僕と同じで妥協をしない。つまり、アメリカならではのストーリーを映像化するために、日本人の撮影監督とイタリア人の美術デザイナーとポーランド人の衣装デザイナーを起用したんだ(笑)。だけど、大事なのは全員がすばらしい仕事をしてくれたってことだよ」

スタッフの誰もがボストン・ロケを敢行することに異論はなかった。また、可能なかぎり「実際の事件現場を使った」と監督のクーパーは明かす

製作のパトリック・マコーミックも「史実どおりのロケーションを使って、迫真性を打ち出したかった。実在の人物が出入りしていた場所を舞台にすることで、観客は同時にタイムスリップできると思います」と語る。

ジョニー・デップも同感だ。「サウシー帯は本当に大きな役割を果たしてくれたんだ。ジミー・バルジャーの生きざま、境遇、人となり、そしてほかの登場人物を語るうえでね。(監督の)スコットも、その点をしっかり心得ていたよ」

ロケーションのひとつとなったサウス・ボストンのランカスター通りのガレージは、バルジャー、ステイーヴン・フレミラ“ウィンターヒル”ギャングの事実上のアジトだった。また、撮影隊はクインシー地区を流れるネポンセット川でもロケを敢行。この高架下の川沿いはバルジャーが多数の死体を埋めた現場として知られる。

サウス・ボストンの内外で撮影するときは住民感情に配慮したと製作のブライアン・オリバーは言う。「地元の人たち、とくにバルジャーに苦しめられたかもしれない人たちにとっては辛い記憶を蒸し返すことになるのではないかと責任を感じました」

「ボストンの人たちは本当に協力的で、撮影隊を温かく迎えてくれたんだ」と監督のクーパーは感謝する。「現地での理解と協力がなかったら、今回のロケは成立しなかった」

スタッフにとって大きなハードルだったのが、バルジャーが暗躍したころに比べて街の景観がすっかり様変わりしたことだ。美術のステファニア・セツラが説明する。「時代物の映画の場合、たとえ30～40年前のストーリーであっても、いかに現代らしさを削るかにはいつも頭を悩ませます。ボストン一帯でも、ここ数十年の間に、あちこちで改修が進みました。ですから、まずはリサーチ。これは基本中の基本です。当時の新聞記事、写真、TVのニュース映像を徹底的に研究しました。FBIの捜査官やジャーナリストにも話を聞いたんです」

当時の景観を忠実に再現するために美術スタッフは信号機を付け替え、電話ボックスを設置した。いまや電話ボックスは携帯電話やスマートフォンの普及で、ほとんど姿を消してしまったからだ。また、路上の白線も手直しする必要があった。

「脱帽しました」と原作者のジェラード・オニールは言う。「スタッフの手によって、当時のボストンがそっくり蘇ったんです」

消えてしまったロケーションもある。サウシーの“トリプル・オー”はバルジャー一派が溜まり場にしていたバーだが、今はオーナーが変わった。「“トリプル・オー”の内外で展開するシーンがいくつかありました」と美術のセツラは振り返る。「そこで、似たような雰囲気のお店を探し回ったんですが、ケンブリッジの外れにうってつけの建造物を見つけました。そこはポーランド系アメリカ人の会員制クラブですが、外装を手直しして“トリプル・オー”に見立て、建物の前の路上も手を加えさせてもらいました」

ボストンの約16キロ北に位置するマサチューセッツ州リンでは屋外シーンが撮影された。そのひとつが聖パトリック・デーのパレードだ。パレードではベネディクト・カンバーバッチ扮するビリー・バルジャーが先頭に立って闊歩する。

ミスティック川を挟んでボストンの真向かいに位置するチェルシーでは、空き倉庫を改造したサウンドステージが完成した。セツラ率いる美術チームはここに数パターンのメイン・セットを建設。バルジャーとビリーが幼少時代を過ごし、彼らの母親が生涯暮らした公営住宅もそのひとつだ。「公営住宅の資料写真を見せてもらい、ロケハンもしたのですが、今の公営住宅は間取りが狭くて撮影には不向きですし、70～80年代のものとは似ても似つきませんでした」とセツラは言う。「そこでサウンドステージにセットとして作ったんです。壁紙も床も思いどおりに再現できました。あとは内装を整え、時間の経過に合わせて手を加えました」

FBIのボストン支局として使われたロケーションは2つある。ひとつはボストン中心部にそびえるオフィス・ビルで、その高層ビルの空いた1フロアにコナリーやマクガイヤのオフィス、取調室、会議室、組織犯罪対策室を設置。もうひとつはボストン市役所だ。市役所の廊下や中庭が撮影に使用された。

既存のロケーションをもっとも大胆に活用したのは「ボストンにマイアミを誕生させたときです」と製作のマコーミックは話す。「これは美術のステファニアのお手柄ですよ。あるシーンで1982年のマイアミが登場するのですが、今のマイアミに当時の面影は存在しません。ですが(マサチューセッツ州東部の)リビア・ビーチに平らな石が続いているスポットを発見しました。ステファニアは美しい風景写真を参考にしながら、マイアミのリトル・ハバナにあった海辺の

カフェをそこに再現したんです。周辺にはヤシの木や白砂や年代物の乗用車を置きました。おかげでマイアミまで出向く手間が省けました。ポストンの近郊ですべて間に合いましたから」

衣装のカシア・ワリッカ＝メイモンも虚実を交えて各キャラクター衣装をデザインしていった。「実在の人物がモデルの場合は、その人物のトレードマークになるスタイルを見つけるようにしています」とメイモンは話す。「当時のギャングたちの服装はとくに派手ではなかったし、これといった特徴も見受けられませんでした。バルジャーだけは独自のスタイルを貫いていました。彼の写真を見ていて気づいた点がいくつかあったので、監督のスコットに相談したんです。そのとき、レザー・ジャケットを主役にしたコーディネートと、それ以外のアイテムに時代を反映させることを提案しました。ですから、バルジャーはほぼ全編を通して同じスタイルのレザー・ジャケットを着ています。色だけは黒から茶系に変化していくんです」

メイモンはリサーチの結果に基づいてアクセサリーも用意した。「写真で見るバルジャーはオーダーメイドのカウボーイ・ブーツを愛用していました」とメイモンが続ける。「アルカトラズのバックルが付いたベルトも、彼のお気に入り。そのバックルはFBI捜査官からもらい受けた品だったので、撮影用にはレプリカを用意しました。バルジャーは何十年もハイウエストのジーンズとタイトなTシャツで通していましたから、その2つも定番のアイテムに加えました。ジョニー（・デップ）は全身で役に入り込むだけに、衣装の着こなしもさまになっていた。こういうコラボレーションが理想なんです——キャストとスタッフが同じ方向を向いているということが、今回の現場はまさにそうでした」

メイモンはまた、スティーヴン・フレミがオフホワイトの上着をはおっている写真を複数見つけた。そこで、フレミ役のロリー・コクレインには淡色のジャケットを数パターンしつらえ、定番のスタイルにした。また、ジェシー・ブレモンズ演じるケヴィン・ウィークスは若手のギャングにして元ボクサーである点を考慮し、機能的なスポーツウェア・タイプの服にボクシング・シューズを合わせることにした。「実在の人物を研究し、その成果を映画の衣装に翻案していくのはおもしろい作業でした」とメイモンは話す。

ジョエル・エドガートン扮するFBI捜査官のジョン・コノリーは、ほとんどスーツ姿だ。それだけにデザインもらくだったのではと思いきや、メイモンは否定する。「じつは難題でした。コノリーはストーリーの進行とともに目に見えて変わっていきますからね。最初はいかにも吊るしのスーツを着ていますが、そのうち派手めの、仕立てのいいスーツを身に着けるようになる。とはいえ、やりすぎはいけないので、微妙な変化をもたせるようにしました。FBIという“枠”からはみ出してはいけませんから、ギリギリの線を行ったつもりです」

ベネディクト・カンバーバッチ演じるビリー・バルジャーのスーツにも立場の変化が見て取れる。メイモンの見立てでは、当初のいでたちは「政治家にしては、やや個性的かもしれませんが。でも、ビリーは政界の水にすぐになじみますから、選ぶスーツも立場をわきまえた、完璧なものになるんです」

メイモンは仮縫いの段階で、少々トリックを施した。ズボン幅と背広の肩幅を広めにとり、カンバーバッチの背丈を実際よりも低く見せる工夫をしたのだ。カンバーバッチ自身も体重を増やして体型を変えると同時に、メイク・チームが頬に特殊メイクを施し、顔の輪郭に丸みをもたせた。

精巧にデザインされた特殊メイク用のパーツは、ジョニー・デップをバルジャーに変貌させる際にも使用された。メイク・チームを率いるジョエル・ハーロウが説明する。「ジョニーにとっては、自分の顔をできるだけバルジャーの顔に似せることが当初からの命題でした。まずはジョニーの首から上をスキャンしてデータ化し、ネット上で見つけた画像を参考にしながら、シリコン製のパーツを制作しました。納得が行くまで何度もテストを重ねましたよ。額と鼻に重点を置き、バルジャーとジョニーのそれぞれの面影が出るように工夫したんです。シリコンの厚み、とくに額の厚みを加減する作業にはかなり時間をかけました。加減を間違えると、表情が作りこくなるんです」

バルジャーの特徴的な生え際はグロリア・キャスニー率いるヘア・チームがシリコン製のパーツを使ってみごとに再現した。ハーロウが事前に制作したパーツはデップの骨格にぴったりフィットし、額から眉までをカバーする。人工毛／ウィッグを担当するカーン・トランスはこのパーツに数千本もの人工毛を植え付け、生え際に続いて眉毛を完成させた。この長時間に及ぶ作業についてキャスニーは「できるだけ自然に見せるために、カーンは1本1本手作業で

植毛しなくてはなりませんでした。そのあと、私がジョニーの後頭部にシルバーグレーのウィッグをつけました。これをヘアラインになじませ、ジョニーのダークな地毛をカバーしたんです」

想像しただけでも気の遠くなるような作業だが、じつは一度使用したシリコン製のパーツは二度と使うことができなかった。「ですから、連日、新品を用意しなくてははいけませんでした」とキャスニーは振り返る。「ある時期は24時間フル稼働。2人のスタッフが12時間ずつ交代でカーンを手伝いました。あとはバルジャーの年齢を頭髪に反映させる必要があったので、徐々に白髪を増やし、髪のパリュームを少なくしていったんです。年齢に合わせて、もみあげも変えました」

「とにもかくにも、あっぱれな変身ぶりだった」と監督のクーパーは感服した。

ウィークス

「最初 奴はケチな地元ギャングだった
シマはサウシーだけ
だが たちまち大物に
理由が分かるか？
FBIが好きにさせたからだ」

スコア

主要な撮影がクランクアップしたあと、監督のクーパーは編集のデイビッド・ローゼンブルームと編集室に入り、作曲家のトム・ホルケンボルフとスコアの相談を始めた。

「この作品を観終わったとき、手のひらは汗でぐっしょり、膝はガクガクになりました。それくらい感動したし、衝撃を受けたんです」とホルケンボルフは本作の感想を述べる。

「これは幸先がいいぞと思ったね」とクーパーはにんまりする。「トムは『しばらくもって曲作りをさせてほしい。一週間後に連絡するから』と言ったよ。で、一週間後に48分のスコアを完成させてきたんだけど、それを聴いてぶっ飛んだね。すばらしい出来だった。僕が望んでいた情感とペース、そして全編を貫く不穏なムードをみごとに捉えていたんだ。トムはこちらの意向をすべて汲んで、みごとにまでに扇情的なスコアを完成させてくれた。おかげで作品全体が引き締まったよ」

「真っ先に思ったのは、バルジャーのテーマをどうするかでした」とホルケンボルフは言う。「バルジャーは極悪人で心に深い闇を抱えている。その闇はもちろんのこと、彼が見せるさまざまな側面も音で表現したかった。そこで思いついたのが、ピアノとチェロのトレモロを低周波で繰り返すという手法でした」

「何をしてかすか分からないバルジャーの激しい気性が、このテーマを通じて観客に伝わるんじゃないかな」とクーパーは話す。

ジョン・コリーのテーマは音程の落差が印象的だ。ホルケンボルフが解説する。「コリーのテーマは低いキーで始まり、徐々に高くなるけれど、あるところで足踏みし、低いキーに逆戻りする。そこには、高みにのぼりたくて仕方がないのに足を引っ張られるコリーの姿が象徴されています。ストーリーが進むにつれて、キーの落差はさらに大きくなりますよ」

このテーマにもチェロが使われている。「作中の人物のさまざまな顔を表現するのに、チェロはうってつけでした。じつは、このスコアの主役はチェロの音色なんです」とホルケンボルフは明かす。

「チェロは好きな楽器のひとつなんだ」とクーパーは言う。「チェロの音色はじつに重々しいけれど、パワフルな響きがあるからね。今回のスコアはフルオーケストラの演奏もあれば、弦楽器をふんだんに使うセクションもある。だけど、シーンによっては……緊迫したシーンでは、ごく小さな編成の弦楽合奏かチェロのソロ演奏が流れるんだ」

もうひとつの主要な楽器がパイプオルガンだ。ホルケンボルフは「パイプオルガンは、この映画にふさわしいと思いました。タイトルからして『Black Mass(黒衣のミサ／原題)』ですから」と説明し、この作品のためにパイプオルガンを一台購入したと明かした。「パイプオルガンは優秀な楽器で多彩な音色を奏でてくれます。スコットにその価値を認めてもらえてよかった。作曲家の使命は監督のビジョンを支えることですから」

「僕もスコットも、スコアに抑えを効かすことで一致しました」とホルケンボルフは続ける。「しかし、そうした制約のなかでも創作の自由を存分に与えてもらった。僕が投げようとしたのは変化——ストライクゾーンのやや左を狙う球です。登場人物を表現するうえで扇情的なサウンドは不可欠と考えたのですが、スコットはそのサウンドを大いに歓迎してくれました」

「トムはものすごい異才の持ち主だ。バルジャーとジョン・コノリーの数奇な間柄、そしてバルジャーに食い物にされた街に残る永遠の爪痕——それを完璧に理解していたよ」とクーパーは感心する。

主演のジョニー・デップが総括する。「ジミー・バルジャーがコノリーと組んで“商売”を始めたのは、同じサウシーの出身として通じ合えるものを感じたからじゃないかな。サウシーの絆は固い。それは今の時代も変わらないんだ」

最後に監督のクーパーがくくった。「この作品で掘り下げたかったのは兄弟という絆、忠義という絆のほか、登場人物たちを暴走させた野望、私欲、慢心なんだ。僕にとって大事だったのは、犯罪ドラマにとどまらない人間ドラマを描くこと。人間でもあった犯罪者のストーリーではなく、犯罪者でもあった人間のストーリーを伝えたかった。その人物が非難に値するかどうかは別としてね。1970～80年代のボストンでは、一部の警察関係者と犯罪者は区別がつかないありさまだった。その事実を片時も忘れないてはいけないと思ったよ」